

## 金澤古蹟志卷六

### 城外堂形邊

#### ○堂形前

俗に堂形或は本堂形と呼ぶ。廣坂下より仙石町へ出づる間の惣名にて、元祿六年の土帳に、古堂形前或は古堂形近所・古堂形裏門近所など記載し、享保九年の土帳にも、古堂形前とありて、元祿・享保の頃までは古堂形と呼べり。いにしへ此の地に三十三間堂の形を建て置かれたるが故なり。本堂形と呼べるは、新堂形に對したる稱にて、改作所舊記に載せたる享保三年正月の書附に、古堂形・新堂形と見ゆ、金澤町會所留記寶永二年五月の書附に、本堂形前とあり。此の後々には堂形或は堂形前と稱し、此の地邊の町名と成りたるを、維新廢藩置縣戸籍編成の際、堂形前の稱號を廢し、廣坂通と改稱なしたり。廣坂の下邊なる故なりとぞ。

#### ○堂形前地名之來由

此の地は、今の縣廳の地邊に三十三間堂の形を摸し、的場ありし故に其の的場を稱して堂形といひ、その前通なる地故に堂形前と古來呼べり。然るを俗に此の邊を堂形とのみ呼べるは誤なりといへり。有澤武貞の金澤細見圖譜にも、堂形は京都の三十三間堂の間尺を摸され、射手の士に通り矢を稽古仰付られたり。後年此の跡に米藏を作るといへども、地名と成りて今に堂形と云ひ、後又別に米藏出來し、是をば新堂形と云ひ、初めの地をば古堂形と云ふ。實に意に不叶地名なりといへり。平次按するに小松町會所留記に載せたる萬治元年十月十日町年寄共の書簡に、内々申談候堂形御藏破損之儀、御詰藏之分は大形出來云々とある堂形御藏といへるは、小松沼町にありし米藏なり。此の時代頃より米藏をば堂形藏と呼びたりしと聞ゆ。是金澤堂形米倉より移りたる稱號にて、有澤氏の實に意に不叶地名なりといへるもの、金澤なる堂形の稱號のみならず、小松町へまで移りたりといふべし。

#### ○堂形的場

三州志來因概覽附錄に云ふ。堂形は其の初め京都の三十三